



殿さまの茶わん (26)

殿さまは、百姓の生活がいかにも簡単で、のんきで、お世辞こそいわないが、しんせつであったのが身にしみておられまして、それをお忘れになることがありませんでした。

お食事のときになりました。すると、膳の上には、例の軽い、薄手の茶わんが乗っていました。それをごらんになると、たちまち殿



殿さまの茶わん (27)

さまの顔色いろは曇りました。また、今日から熱い思いをしなればならぬかと、思われたからであります。

ある日、殿さまは、有名な陶器師を御殿へお呼びになりました。陶器店の主人は、いつかお茶わんを造って奉ったことがあったので、おほめくださるのではないかと、内心喜びながら参上いたしますと、



殿さまの茶わん (28)

殿さまは、言葉静かに、

「おまえは、陶器を焼く名人であるが、いくら上手に焼いても、しんせつ心がないと、なんの役にもたたない。俺は、おまえの造った茶わんで、毎日苦しい思いをしている。」と諭されました。

陶器師は、恐れ入って御殿を下がりました。





殿さまの茶わん (29)

それから、その有名な陶器師は、
厚手の茶わんを造る普通の職人に
なったということです。

おわり

